日刊 建設工業新聞

2007年（平成19年）1月29日（月曜日）

月曜 Monday Interview インタビュー

■ビーチ文化振興協会の役割は？

「イベントで海辺の使い方提案し、利用者の視点を社会資本整備に」

地元ビーチクラブを全国に

公共と両輪となって海辺づくり

大村（おおむら） 哲夫（てつお）氏 NPO日本ビーチ文化振興協会会長

日本では海水浴シーズンが終わると閑散とし、海辺がうまく使われていない。海辺とのかかわり方や使い方を見直し、新たなビーチライフを提案しようと活動しているのが、NPO日本ビーチ文化振興協会だ。会長を務めるのは、国土交通省の中部地方整備局長を最後に退官し、社会資本整備を知り尽くした大村哲夫氏。既に社会資本は整備するだけでなく、うまく使っていく時代に入った。協会活動を通じて海辺の使い方を提案し、「利用者の視点を社会資本整備に取り入れていきたい」と話す大村氏にインタビューした。

日本にもあった海辺の文化

「02年6月、国土交通省港湾局に川勝平太国際日本文化研究センター教授を座長に『新たな海辺の文化の創造研究会』が設置され、日本の海辺の活性化が議論された。日本列島の海岸は約3万5000キロあり、1人当たりで計算すると米国や仏国の4倍にもなる。海辺とのつながりが強いはずだが、海水浴シーズンが終わると閑散としてうまく使われていない。海外では四季を通じて海辺で楽しんでおり、海辺を使いやすくするための議論をした。役所の場合、議論をして終わってしまうことが多いが、検討成果を運動として広げるため、04年8月に内閣府の認証を受け、NPO日本ビーチ文化振興協会が発足した」

「世界的にも海水浴をメーンに海辺を利用しているところはほとんどない。ビーチのイメージが強い米国西海岸にしても、海水が冷たくて海水浴はできない。ジョギングやウオーキング、日光浴が中心で、本来は春と秋が最も良い季節だ」

「海辺の文化は日本にもあった。異国との交流は海から始まったし、海の神社やお祭りなども多い。だが、埋め立てや工場建設が進み、ある時期から海辺に背を向けるようになってしまった。欧米に後れを取ったのは、ここ数十年の話だ」

お台場や新舞子でビーチライフ・イベント

「海辺の楽しさをPRするため、06年5月にお台場（東京都港区）でビーチライフ・イベントを行った。あえて5月に設定したのは、春からこんな楽しいことができると体験してもらうため。当協会はビーチにかかわるさまざまな団体とのネットワークを持っている。協力を得てビーチバレーやフラダンス、ビーチサンダル飛ばし、シーカヤックなどを行ったが、1日に3万人も訪れ好評だった」

「新舞子（愛知県知多市）でもイベントを行い、ビーチバレー・コートを寄贈した。今では地元のビーチバレーのメッカとなり、ここで練習をした高校生が全国大会で優勝するまでになった」

「阿字ヶ浦（茨城県ひたちなか市）では、ビーチクラブ設立を目的に毎月1回、地元の実行委員会と一緒にビーチバレーやビーチウオーキングなどを行っている。レジャーの多様化で人が集まらなくなり、地元に海を見直そうという機運があり、年間を通して人が集まる海にするため、自主的取り組みが始まっている地域だ。われわれが豊かな海辺づくりのお手伝いをし、地域振興や環境教育にも役立てばよいと考えている」

「地元の小学生を交え、のりの養殖や干物づくりも行っている。漂着物を使った〝渚（なぎさ）のアート〟なども行うが、これほどメニューがあるとは知らなかった。ビーチに関するネットワークがどんどん広がっている。海辺には特色があり、ビーチコートがない方がよいところもある。〝里浜〟の考え方に立ち、スポーツに限らず、得意な人たちがいれば連携して活動したい」

使う側とコミュニケーション取りながら整備

「道路が足りない時代には、子どもが路地で遊ぶことを禁じたが、最近では車が入ってこない路地のような場所の整備も始まった。子どもが川に入れないようにした時代もあったが、最近では川で遊べるようにするなど、社会資本整備が（ユーザーに）フレンドリーになろうとする動きがある。今後の社会資本整備は市民の視点に立つ必要があり、海辺版が当協会の活動だ。砂浜に水道を設置したり、工学的に決めてきた砂浜の傾斜を利用者サイドから緩やかにするといった工夫も見られ始めた」

「今年はお台場や名古屋、福岡、酒田などでビーチライフ・イベントを行うとともに、地元にビーチクラブを作る活動にも力を入れたい。ライフセーバーとしての安全管理や、子どもたちへの文化継承、さまざまなビーチ活動の提案を行う組織で、（われわれの）イベントなしでも機能するモデルを作りたい。今後は、作る側と使う側がコミュニケーションを取りながら社会資本整備を進める時代になる。時間が掛かるかもしれないが、ビーチクラブを全国展開し、両輪となって（海辺を）整備する仕組みを構築したい」

「国交省の港湾事務所長もわれわれの活動に参加してくれているが、公共の意識も変わるはずだ。阿字ヶ浦では、鹿島港湾・空港整備事務所の所長がビーチバレーに参加し、地元に溶けこみ新年会や忘年会にまで呼ばれるようになった。地元の意見を吸い上げ、コミュニケーションを図りながら仕事を進めている」。

トピックス

日本ビーチ文化振興協会は、ビーチバレー日本代表男子監督の瀬戸山正二氏が、国交省港湾局の建設課長だった大村氏を訪問したのをきっかけに産声を上げた。世界を転戦して海辺の使われ方に疑問を持った瀬戸山氏が、各方面に働きかける中で大村氏とめぐり会い「海辺の文化研究会」に発展した。

協会理事には、徳野涼子さんや佐伯美香さんなどビーチバレー五輪選手が名を連ねる。06年末のアジア大会では女子の田中・小泉ペアが銀メダルを獲得。瀬戸山氏と徳野さんが選手のサイン入りユニホームを大村会長に持参した＝写真。

協会は個人・法人会員で構成され、活動に賛同してくれる会員を募集中だ。同協会の電話は03・5611・7658。